なかま新聞

なかま新聞
編集　新聞部員
姫路市北条宮の町
215番地
TEL079-287-1025

笑顔は健康の源

写真：岩村和雄

皆さん明けましておめでとうございます。

昨年の漢字一文字は「金」でした。私個人としては「迷」でした。今年こそは「笑」にしたいものです。

新年を迎える度に、今年こそはと、新たに目標を誓うわけですが思うようにならないのが現実です。

さて私は「一日一生」のつもりで、明るく、楽しく前向きに過ごせたらいいと、念じています。

昨年の反省として「不可能を可能に」すべく体の動きを何とか現状以上に良くしようと努力してみたものの逆効果で、どうすればコツが掴めるのか試行錯誤の毎日ですが、未だに分かりません。　やはりこの病気は悪くなっても良くはならないのでしょうか。毎日が歯がゆく自暴自棄になるときがあります。

何はともあれ、転倒しないように心がけ、家にいてもヘルメットを被って事故防止に努めています。

「あけび」にお世話になって三年目を迎え、この間スタッフ始め仲間の皆さんに大変お世話になり感謝の気持ちで一杯です。どうか皆さんにとって良き年でありますように祈っています。

●宿泊したアリアホテル前

アメリカ紀行

足がだんだん不自由になり、最後の旅になるかもしれないと覚悟して、シアトルに住む息子夫婦のもとへ、そしてラスベガスへ飛びました。アメリカは体の不自由な人には親切にしなければならない法律があり、車椅子で飛行機の乗継やバスの移動で、大変行き届いたサービスを受けました。ラスベガスはカジノが合法化され、空港やホテルにはカジノが一杯あります。またホテルごとにテーマがあり、フランス、ベニスとミニ世界旅行をしているようで、至福のひとときを過ごしました。

●ベネチアンホテル運河前

●パリスホテル
エッフェル塔前

「笑顔は健康の源」とも　森澤　博

ティータイム

昨年の漢字一字には「金」が取上げられた。これは至極当然の選択だったと言えよう。で、二番目には「輪」が挙げられていた。この輪は、古語辞典でみると「一説に和の符号とある」と書かれている。この「和」は国語辞典によると「相手の言い分、立場を大幅に認め、譲れるものは譲り合うこと」とあった。

ところで、私は昨年半ばのある朝、右太ももをそれ迄とは違った激痛に襲われた。直ちに受診し、あれこれの鎮痛剤を服用した。が一向に治まらない。で、私は、この苦痛に耐える手段をみつけなければと焦った。

ここで、私は苦痛に立ち向かう姿勢を変えなければと自答した。それは、私が居る「輪」即ち「あけび」のなかでの支え合に、これ迄以上に係わっていくこと。そこで「和」の力を養うこと。それが「泣くのではなく、笑うこと」に結びつくと信じて。

菊池　武明

仲間の声

山田　重子

私の今年の目標は、去年あまり出来なかったリハビリを今年は励んで、タクシーいらずの健脚になって、手をつないで貰わなくても自分の力で歩けるように努力しようと思っています。

西本　洋子

私は、現状維持が今年の目標です。そのためには、声を大きく出して、笑顔で楽しく毎日を過ごすことです。

大西　正

今年六十五才の私の、二〇一三年の抱負は、姫路のゆかた祭り、お城まつり、網干の川祭りのほか、各地での盆踊りの音頭がとれる播州段文音頭網干保存会に入り、播州音頭を、次の世代への引き継ぎ役として、体のつづく限り頑張っていくことです。

絵：橋本幸子

思い出すと、私か小学生の頃、浜で家業の壺網の手入れを手伝っているところへ自転車に竹籠や竹かんじきなどを積んで売りに来ていたおじさんに「幼いのに上手に修理するな」とよく褒めて貰ったものです。そのおじさんは、盆踊りの音頭をとるのがうまく、盆の三日間、日が落ちてから日付の変わる頃まで続いていた盆踊りの音頭を取っていました。

ところで、このような音頭取りの方も、年々高齢化して跡を継ぐ人が必要になっていました。私は、五十才になっていましたが、思い切ってそのおじさんの家を訪ね、音頭取りの技法を教わったのです。

岩佐　雅展

まず、皆さんに、昨年暮れの「あけび紅白歌合戦」の折、ご心配をかけ、お騒がせしたことをお詫びしなければなりません。そこでその顛末をご報告して、皆さんにも是非ご注意頂くようお願いする次第です。

当日の歌合戦の白組トップにたち、唄い終えて席に戻り、三番目の歌い手に声援を送りながら、テーブルの馳走を口に入れたところで、その食べ物がのどに詰まり、呑み込もうにも、吐き出そうにも、どうにもならない状態になりました。あけびの看護師さんが駆け付けて貰ったところまでは記憶しているのですが、その後は意識不明の状態で、気がついたのは、救急車の中でした。隊員から名前を呼ばれ、「掛かり付けの病院へ行きます。」と言われても事態が分らず、病院に着き、主治医の声を耳にしてはじめて、喉に詰めて運ばれたのだということに気付いたのです。

「あした(朝)には、紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり」と言う仏教の御文章を思い出すような出来事から、あけびの看護師さんをはじめ職員の皆さん、ボランティアの皆さん、そして当日参加しておられた利用者の皆さんのチームワークで命びろいさせて貰いました。

私の最大の欠点は、何かのイベントに参加すると、自分自身が病人であることを忘れ、健常者の如くに振舞うことです。この機会に肝に銘じて生きて行きたいと思います。

絵：船越悦子

岡野　紀美子

今年の四月で、「NPO法人あけび」は開所十年目を迎えます。神経難病の仲間が集い共に泣いたり笑ったりできる場所を…との思いから患者さん自らが立ち上げられた施設です。あけびのご利用者様は、人生経験豊かな方たちで、その人生から多くを学ばせて頂いています。また、病気についての学習意欲を高く持っておられ、あけびが担う情報発信の役割の重要性を強く感じています。当初お元気だった患者さんが遠くに旅立たれたり、施設に入られたり、その都度もっと自分に出来ることはなかったのかと自責の念にかられることもしばしばです。看護師の立場として皆さまのお役に立てるよう、またお心に寄り添えるよう日々精進していきたいと思います。

絵：岩村和雄